



第2回講座「観測結果からわかる海の温暖化と海辺の生物、漁業への影響」を、8月30日(土)、大阪歴史博物館研修室1にて開講しました。

講演「海洋の変化と地球温暖化」永井千春さん(大阪管区気象台 海洋情報調査官)

世界の年平均地上気温の上昇率が+0.84℃/100年であるのに対し、世界の海面水温の上昇率は+0.51℃/100年です。これは、海洋の熱容量が大気の約1000倍であり、「暖まりにくく冷めにくい」からです。つまり、海洋は大気に比べて変化が遅い分、一度変化すると元に戻りにくいのです。地球温暖化を考える際、地球表面の約7割を占める海の存在を無視することはできないでしょう。



報告1「温暖化と海の生き物」佐名川洋之さん(須磨海岸生物調査研究所 学芸員)

温暖化しているというのは、科学的データから事実であると言えます。ところが、南方性種の北上やサンゴの白化等の原因が、温暖化であると断定することはできません。海の生き物に関しては、温暖化による影響か「?」、と常に疑問符を頭に浮かべて考える必要があるでしょう。

報告2「漁師が感じる漁業の異変」河西信明さん(鳥取賀露港 弁慶丸漁師)

鳥取沖では海洋環境のめまぐるしい変化のために、長年の漁師の勘や経験が活かせない、という状況にあります。また、エチゼンクラゲによる被害がここ5年間一切ないこと、マサバやマイワシといった冷たい海でよく獲れる魚の漁獲量が増加していることから、温暖化が進みながら、海では寒冷化が進んでいるのではないのでしょうか。

延岡 由規 (CASAインターン)



第22期地球環境大学の最終回として9月20日(土)に

第3回講座「最新の科学、IPCC報告書で学ぶ地球規模の温暖化、日本への影響」を行いました。

講演「IPCC報告書で学ぶ地球規模の温暖化、日本への影響」山本 善弘さん(大阪管区気象台)



「地球温暖化予測情報第8巻」を基に、日本の将来予測については、平均気温、猛暑日、熱帯夜、海面水温、いずれも増加傾向が示されています。しかし降水量については、1時間に50ミリ以上といった短時間強雨は太平洋側で明らかな増加が示されているものの、年降水量については明らかな変化傾向は見いだせていません。

報告1「北上する南方系の昆虫たち」岡 秀郎さん(大阪自然保護協会)

協会ではトンボやセミ、蝶などの調査を行っています。昆虫は寿命が短く、生息環境が多様で、温度変化にも敏感なため「環境変化のセンサー」だと言われています。例えば温暖化などによって種の置き換わりが進むと、生態系が変容し、多様性の低下へとつながり、ひいてはそのサービスを受けている私たちにも影響を及ぼすこととなります。



報告2「ブナ林と地球温暖化」弘田 純さん(和泉葛城ブナ愛樹会)



1922年に国の天然記念物に指定された和泉葛城のブナ林は、近年大木の倒木や枯れ死が目立ち、さらに種が落ちて自然に根付いて成長する実生^{みしょう}も減り、後継樹である若木の減少が著しくなっています。そのため会ではブナの調査だけでなく育苗、植栽の作業も進めています。

三澤 友子 (CASA理事)